
IS -After infinity!-

ジョナサン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - After infinity! -

【Nコード】

N0342BA

【作者名】

ジヨナサン

【あらすじ】

IS本編のある世界から数十年後・・・。
織斑秋良は祖父からIS学園に行くよう勧められる。
しかしそこではクラスメイトが全員女だったり従兄や従姉に会ったり、旧友？と再会したりと、衝撃的生活が待っていた！
ISを使える男の物語が再び幕を開ける！

infinity00 + はじめに(前書き)

はじめに . . .

この小説の前の世界観はこちらが勝手に想像したものです。深くは考えず、似て非なる別物とお考えください。

一夏が誰と結ばれたのかはお答えしかねます。そのため、それに？がる質問も禁止とします。

ヒロインズや千冬姉も同様です。

infinity00 + はじめに

まだ進学先を決めていなかった少年に老人は言った。

「IS学園に行くといい。きっとお前にとってかかってない経験が出来る」

老人は少年にある物を渡した。

白銀の、無骨な腕輪。

「入学に必要なものだ。持って行け」

多分今の時代、何らかの学生は軽く「死ぬ、死ぬ」と言っていることだろう。社会人達も、そんなことを呟いているかもしれない。だが……

「（……死ぬ。死ぬる）」

それは多分、俺の今の状況に置かれれば、男性の皆様は、洒落にならないはずだ。

クラスメイトが、全て女子だという。

1年1組、IS学園の教室である。

infinity00 プロローグ

数日前

俺は未だに進学先が見つからないでいた。成績は割と良かった（・・・はず）ので、優良校にも入れた。でも、やはり今の自分よりランクの高いところは途中でついていけなくなることも多い。かといってランクの低いところではその先の就職が辛くなるだけだ。・・・ああー。何で閉校されちゃったんだか、藍越学園。じっちゃんの話によると、相当サービス精神旺盛な学校だったらしいが。などと文句を言っても始まらない。何とか決めなければ。仲の良い従姉はランクが高い国立学校に行くって言ってやがったし。そんな大変な中、ある日俺はじっちゃん・・・俺の祖父から、ある学校に行くように勧められた。IS学園というらしい。現代最強の兵器、インフィニット・ストラトス。そのパイロットを主に育成する、専門高校と言っ奴だ。

始め、「国立じゃんそこ！」と言ったのだが、どうしても気になったので、第一志望に入れた、と。そしたら入れちゃったよ・・・。

少年が去った後、老人は遺影の前に座った。

「あいつも行くよ。俺たちの学園に」

老人は、今はもうこの世に居ない妻の名を呟いた……。

infinity00 + はじめに(後書き)

どうも、ジヨナサンです。前回邪m・・・いえ、ミスによって前の小説ストップさせました。

今回こそ、頑張っていきたいです。

回想終了。

とりあえずこの状況は辛い。

女子の目線が一斉に向かってくるのを感じる。

「・・・ハッ!?まさか俺、視姦に弱かったのか?そんな変態野郎だったのか!?俺ッ!?

「いつまで妄想に浸ってやがる」

「ガッ」

バシッ!と、俺の頭に堅い物が降りおろされた。

「いつっ・・・」

「ほら、自分の自己紹介ぐらい自分でやれ」

そう言った人物を見上げると、俺の見知った顔が。

「と・・・冬也さん!?

「何を驚いてる。さっさと自己紹介しろ。あと今は皆堂先生、だ」

俺の従兄、皆堂冬也さんは、そう言つと教壇の後ろに回つた。ダン

!と出席簿を教壇に置く。

どうしてここに冬也さんが、とも思ったが、俺はまた殴られたくないので、とりあえず自己紹介をする。

「あー、織斑秋良です」

しーん・・・

「・・・うっ。言葉が詰まった。ヤバい。ここで終わつたら陰気な奴だと思われる・・・!」

「・・・趣味は、料理みたいなことです、以上」

ここは泥沼になる前に早い目に切り上げておくに限る。俺は以上、と言つと同時に席に着こうと・・・

「キヤーーーー!男子!貴重な男子がうちのクラスに!」

「しかもカツコいい!」

「・・・ふふ、先生と合わせて薄い本が出来るわね」

女子が歓声を揚げる。・・・どうやら大丈夫だったようだ。つて誰だ今薄い本って言った奴！出てこい！

「はいはい。HRが終わった後までそのテンションはとっておけ。俺はおしとやかな女が好きなんだ」

冬也さんがパンパンと手を鳴らすと一斉に声が止まった。すげえ。いい もとかごきん うでもここまで統制とれないぞ。

「さっさと座れ織斑。後がつかえてる」

「あ、はい」

そそくさと俺は席に座った。

「じゃあ次」

にしても冬也さんが教師やってるってのは知ってるけどまさか此処とは・・・。

この調子で行くと・・・いや、そんな上手いことある訳ないか。

「皆堂春！元中学三年生！よろしく！」

「それみんな一緒だよ！」

ぐふおっ!？

俺は机に突っ伏した。

従姉まで・・・従姉まで居るとは・・・

確かにここ国立だけどさ。正直恥ずかしい。

「どうした織斑。そんな抜け殻みたいにぶっ倒れて」

冬也さんが若干にやにやしなから言う。

誰のせいだ誰の。

「まあいいか。じゃあ次」

とりあえずこのHRが終わったら訳を聞きに行くとしよう。

「次」

冬也さんが言うのと、後ろの方でカタタ、と席が擦れる音が鳴る。

「エレナ、スノール」

「え……」

ガタツ！！

俺はその声と名前に勢いよく振り返ろうとした。

が、その瞬間に俺のこめかみに何か・おそらくチヨークのような小さな円筒状の物体・がヒット。

「今は静かにさ？」

指の間にチヨークを何本か挟み、笑顔を俺に見せる冬也さん。

「……すみません、冬也さん」

俺が謝ると、今度は二本、さっきよりも強く投げてきた。……何で？

「学校では皆堂先生、な？とりあえずこの時間俺から目離すな」

ああ、さいですか。

「……以上です」

席に座る小さな音がした。スゲエ気になる……！

結局、俺はその後の自己紹介は殆ど覚えられなかった。

HR終了直後、俺はあの少女、エレナの方を見たが、もう彼女は去っていた。……ふむ。今日HRしかないから、明日確かめるしかないか。

俺がそんなことを考えながら、さっさと行こうとしたら、背中にバン！と衝撃が走った。

「おーっす秋良！一緒に見に行こうぜ！部屋割！」

「は、春。超痛い、手加減しろ超手加減しろ」

「男なんですよ、我慢我慢」

いや、お前がそこいらの男より強いんだよ！

俺はにしし、と笑う従姉、皆堂春へ心の中でツッコミを入れた。

「ところで春、この学校だったんだな」

「ん？んん。そう。聞くところによるとかなり快適らしいしね！」

国立の高校って・・・そう言えば俺んちもコイツんちも電車一本で行けたな、この学校。さらに遠いのめんどくさいとか何とか言ってたから、全寮制のここは理想の場所だろう。

ISを学ぶというオマケ付きだが。

「逆に聞くけどさ、秋良」

「何だ？」

「よく合格できたな。お前の頭じゃ一般は無理だろうなーって試験中何度も思ってたのに。」

「ペーパーテストと・・・あと、男子はIS知識の実技だけ？」

失礼な。俺はお前が言うほど頭は悪くない。むしろ成績優良生だ。

「ああ、なんか試験官の人がこれを見た途端目の色変わってさ。なんか実技パスした」

そう言っただけは制服の左腕の袖をめくる。

「・・・何これ？腕輪？」

そこには俺の肘から手首までのおおよそ半分を覆っている、白銀の腕輪があった。

「じつちゃんから貰ったんだけどさ。それ付けてたらいって」

「おじいさんから、ねえ・・・」

腕を組んで、腕輪を凝視していた春だったが、

「ま、いつか。じゃ、部屋割見に行こ」

そう言っただけの手を引っ張り、早歩きだした。早歩きだす・・・新しい動詞の誕生だ。

「・・・って待て、俺自分で歩ける！」

そう言っただけ俺も早歩きだした。

infinity01-1 (後書き)

ここまで予約です。

ここから主人公とIS学園の補足です。

織斑秋良

おりむらあきら

身長：170cm

髪：黒髪ショートヘア。若干ボサボサ気味。

生い立ち：両親が海外出張で、幼い頃から祖父に育てられる。祖母は病で他界。

趣味：手芸と料理全般。剣道を「やっていた」。

性格：若干妄想することもある普通の男子学生。

IS学園

本編と大きく変わっているところは、

「少数ではあるが男子の受け入れが数年前始まった」事。

次回辺りに秋良の従兄従姉にあたる皆堂さんの補足だと思えます。

「よう！秋良、春！」

寮の掲示板で自分の部屋を探していると、後ろから親しげに俺を呼ぶ声が聞こえた。

「お、蒼空」「お、変態」

「誰が変態だ！！」

後ろを春とほぼ同時に振り返ると、俺の友人・・・もとい悪友の布仏蒼空が立っていた。

「ごめんごめん。いまだに修学旅行の覗きの件が忘れらんなくってさー」

全く悪びれる様子のない春が反撃。

「ぐおっ・・・その話はもう良いだろ・・・」

言い返すことが出来ず、昔を掘り返されたことでダメージを受ける蒼空。

「ところで蒼空。お前何でここにいる」

と、俺が言つと

「へへっ、決まってるだろ？俺も試験に合格したんだよ！」

「ふーん。秋良よりよっぽどアホなのだね」

「・・・言ってくれんじゃねーか」

「しかし、お前実際成績マズかっただろ？」

ちなみに俺の記憶が正しければ、2学期期末終了時点で、蒼空の評定全部3以下だったはずだ。

「俺は女の園に行くためならどんな手段も惜しまない！！」

あー・・・

「（コイツ馬鹿だ・・・）」

心の中で、春と同じことを呟いた（多分）、初めての瞬間だった。

「・・・さーて、むっしゅ秋良、見つかったあるかー？」

180度逆に向き、蒼空の事を無かった事にしようとする。

「うーん、せによりーた春さん、みつからないあるー」
俺も便乗。

「おいおい、いつからそんな冷たくなっちゃった？おーい」
聞こえない聞こえない。

ひたすらに自分の名前を探す。

「・・・あ、春。あんた一人部屋じゃん！いいなー」

春が指さした先を見ると一つの部屋番号の横に、織斑秋良という文字が。

「気分的に一人暮らしになれるから、良さそうかな」

「秋良にや一人部屋は勿体無いと思うけどな」

うるさい変態。

「さてさて、俺は・・・なんだ、男子ヤロウと3人部屋かよ、テンション落ちるな」

ざまあみろ、と心の中で言い倒してやる。

で、春はというと・・・

「妥当かなー。女の子同士」

女子の2人部屋だった。

寮の5階以上の部屋に当てられた生徒以外は、基本エレベータの使用が許可されるのだが、初日ということで荷物を担いでいた生徒が多々エレベータに並んでいたの、俺たちは自分の部屋がある8階まで階段を使うことにした。

どうでもいいが、この寮、ビルみたいなんだよな。

幸い俺と春は基本の生活用具と着替え、そして少々の趣味の品だけを持ってきているので、大して重くはないのだが・・・

「はあ・・・はあ・・・ま、待つてくれよ」

明らかに無駄な物80%の蒼空は、喘ぎながらついてきている。

「もういつそ次の階で置いて行きなさいな、エロ本。ハアハア言わ

れながらついてこられると気持ち悪いから。いくら私が心も体も魅力的だつても、もう警察呼んでるレベルよ」

春がシオルダーバッグを片腕で弄びながら言った。

「勝手に・・・人の・・・荷物の中身・・・決めてんじゃねえ！まあ、否定しないが！ それと・・・どこが魅力的なんだよ！？」

すぐさま反論する蒼空。残念ながら蒼空。春は心はともかく体は十分魅力的だ。主に胸と尻が・・・グハツ！？

「あ、ごめん、なんか手の神様が滑らせなさいって」

シオルダーバッグがハンマーの如く俺の顔面にクリーンヒット。

くっ・・・ここが踊り場じゃなかったら大事故になるかもしれないなかつた。

そんなこんな言っているうちに8階に到着。

「やー。以外に短かつたねー」

最後の一段を「えいつ」と軽くジャンプ。

「俺には・・・長かつたけどなっ・・・」

蒼空も何とか上がってきた。荷物が減っているのは優しいこの俺が一部持つてやっているからだ。感謝はしてほしい。

「それじゃ俺、この部屋だから」

蒼空は階段からすぐ近くのドアを指さした。

「そうか。じゃあな」「じゃあね」

「お前ら・・・もうちょい寂しがるどころだろ？」

お前がもうちょつといい性格してたらな。

あっさりスルーして行く。

「あ、私ここだわ」

途中で立ち止まり、親指で隣のドアを指さす。

「おう。荷物の整理とか手伝おうか？」

従弟らしく、そんな気の利いたことを言ってる。

「んー。いや、いや。相部屋の人も居るっぽいし」

「そうか。じゃあ、また明日」

「ん」

そう返事して春は部屋に入っていった。

「で、俺の部屋が端っこの方だから困る」

結局廊下の端まで歩いてようやく自分の部屋を見つけた。

「ただいまー……」

初めてはいる部屋だから冗談になるが、とりあえず言う。しかし当然中には誰もいない。

「……俺の部屋だーッ！！」

小さい頃読んだマンガの真似をして試しに叫んでみる。

しかし返事はない。

「……一人部屋なんだな、本当に」

柄にもなくそう呟いて、ベッドに身を投げ出す。

「……」

冬也さんも居て、春も居て。良かったのかもしれない。

ISは女にしか使えない。だからこの学園は男子が圧倒的に少ないせいぜいここに居る男子は全員整備担当。

1クラスに俺含めて1人居るか居ないかだ。そんな女だらけの生活で、知り合いが居るのが救いだ。

「……とりあえず荷物の整理、やっちまうか」

そう決めて、俺はベッドから跳ね起きた。

そして俺はこの夜、整理に夢中で夕食を食いそびれた。

infinity01-2 (後書き)

設定とか

皆堂春かいどうはる

秋良の従姉。春に生まれたから春と名付けられた。
強い。

身長：168cm

髪型：黒色ショートヘア。

趣味：ファミコン等ゲーム類。つまりゲーマー。

生い立ち：秋良と長い付き合い。同じく剣道を「やっていた」。

性格：元気。

皆堂冬也かいどうふゆや

春の兄。教師。滅茶苦茶強い。

髪型：黒色。若干長め。

性格：何を考えているのかわからないのがクオリティ。

よつと。

俺はほぼ体内時計で目が覚めると同時に跳ね起きた。

毎朝の寝覚めが良い。うん、いい習慣だ。

「さて起きたところで・・・早く飯食おう」

さっさと着替えて食堂に行こう。滅茶苦茶腹減ってる。

「あ」

部屋を出てさっさと行こうとしたが、向かいの部屋の右側、部屋番号の下に目がいった。

エレナ・スノール。

「・・・向かいの部屋だったのか」

「・・・左右を見る。誰もいない。」

・・・

「ごくん、と生唾を飲み込み、ドアノブに手を・・・」

「秋良アおはよーさん！」

「ぐはあっ!？」

バシーン、と背中に強烈な痛みが走る。

織斑選手、これはたまらずダウン。

「大げさだなー秋良は」

悶絶する俺に向かって皆堂春は右手のひらをぶらぶらさせた。

「自分の力の自覚をしるお・・・」

昨日の夜何も食べていない俺にとってこれはかなりのダメージだ。

「ごめんごめん。ちっちゃいご飯おごるから許して」

俺の痛み（物理）はライス小なのか。

「にしてもあんた、エレナって子随分気になるのね」

「うん？」

「ほら、昨日からエレナって名前に結構な反応してたじゃない」

「・・・仲の良い知り合いなんだよ」

「へえ〜〜〜？」

楽しそうに俺を見つめる春。

「・・・別にお前の思ってるような関係じゃないぞ」

「はいはい、そう言うことにしときます。さ、めしいこめしいこー」

・・・なんかはぐらかされたような気がする。

しかし、今はとりあえず腹が減った。何か口に入りたい。

軽い速さで走っている春の背を同じくらい速さで追いかけた。

「あいよ、オムライスお待ち」

俺はオムライスをおばちゃんから受け取ると、朝から天ぷら蕎麦にがつつく春の隣に座る。

「・・・朝から天ぷらとか、大丈夫か？」

「ずずずー！ふふあ！ほははひひほへふはひはひほ」

しかも大盛りにしてやがる。口いっぱい蕎麦を含んでいて、何を言っているんだか。

「さて、俺もいただきますか・・・ん？」

俺は何気なく向こうの方を見た。

高校生に見えない小柄な体型。

アタツシケースを彷彿とさせる背負い鞆。

容姿に見合わぬほどに長いマフラー。

「・・・」

その瞬間俺はただその少女を見ていた。

「・・・よお！秋・・・ラッ！」

バシーン、と俺の背を平手が襲った。

その瞬間から、俺が立ちながら後ろを振り向き、「何すんだー！！」と、

力の入った鉄拳を悪友、野仏蒼空の鳩尾に叩き込むのに、1秒ほどしかかからなかった。

教室に入った時から、授業中も、ずっと考えていた。間違いない。

あのときより背は少し高くなってるが、間違いない、俺の知るエレナだ。時たま時間を見つけては後ろを見る。しかし、何で俺に話しかけてこなかつのだからか。・・・まさかとは思うが、・・・照れてた？いいいや。たぶんありえな・・・

「起立つつつてんだろチョーッブ」

ガン！と、俺の頭に皆堂先生の手刀が叩きつけられた。

痛みを感じるよりも早く、反射的に俺は席を立つ。

「はい、タイムロスがあつたから礼はいい、着席」

うつ、痛い。視線が痛い。

席につくと、冬也さんは

「じゃあクラス代表決めるぞー。まず立候補者起立ー」と言った。

クラス代表。つまり一般高校で言う委員長に当たる。勿論、俺がそんな面倒くさい役になりたい訳がない。

ましてやこの状況で立つ奴なんて・・・

「はい、アシユリー・ブライアント、と」

「よろしく願いますわ」

こういうお嬢様タイプかお調子者だけだ。

「では立候補にあたって何か一言」

「クラス代表に恥じぬよう、皆様を引つ張つて差し上げます」

ほら、こういう人こそ代表になるべきなんだよ。

「・・・んー」

冬也さんは何か考えているようだ。

「・・・よし、このままじゃ面白くない。と、言うわけで誰か代表になってほしいなーっと思っっている奴拳手」

「・・・は？」

俺が呆けている間に一斉に女子の手が上がる。

「はい、アサギさん。誰がいい？」

「はい、織斑君が良いと思います」
え。

「私も織斑君に賛成です」
え、え。

「正直織斑君しかないとと思うんだよね」
「うん、それしかないよ」

え、え、え。

「兄ちゃん、私も秋良に1票」
・・・春、覚えてやがれ。

「と、言うわけだ。織斑、立候補しろ」

ええ〜・・・って冬也さん！妹は「皆堂先生」じゃなくてもいいんすか!?

嫌々起立する俺にクラスが沸く。

「先生」

が、一人の発言により、ぴたり、と空気が止まった。

「・・・何か言うしか無くなるわな、ブライアント」
アシュリーという生徒が、頷く。

「お言葉ですが先生、私は彼、織斑秋良にクラス代表をつとめる器があるとは思えません」

「と、言うこと？」

「まず、彼が男であるという事です。ISに乗ることが出来なければ、5月にあるクラス対抗戦への参加もままなりません」

なるほど、的を射るような的確な指摘。

「次に、彼と私の経験の差です。彼は知るところによると、一般入試を付け焼き刃でやっと合格した」

付け焼き刃とは失礼な。ちゃんと国英数解けたぜ？

「それに対して私はアメリカ代表候補生です」

・・・はい？

「最後に。彼にはやる気が感じられません。ならば私がやるしかないでしょう。以上です」

・・・女子が静まり返る。冬也さんも口を閉ざしている。

「どうですか先生？」

アシュリーが自信満々といった表情になる。

言い返せるものなら言い返して見る、みたいな。

「・・・言いたいことは、それだけか？」

「はい？」

意外そうな顔をするアシュリー。

「よし、ならばその反論を全て押さえて見せよう」

冬也さんがまるでどこかの推理小説の主人公の如き台詞を言い放った。

・・・どうでも良いですが、俺の意志、忘れてませんか？
そして、俺が主人公なんですが、一応。

infinity02-1 (後書き)

新キャラの名前はどこから引つ張ったり自分で考えたりと、苦難してまず、ジヨナサンです。多分マトモにあとがきを書くのはこの小説では初めてだと思います。

さて、俺がお嬢様キャラクターを書くのを苦手だと知っている人は知ってると思います。

ですが、やはり苦手な物は直すべきだと。てなわけで頑張ります。

「まず一つ。織斑はISを動かせない、そう言ったな。実はそんなことは無い」

「・・・どういうことですか？」

「それは・・・コイツが織斑一夏の孫だからだ!!」

「な・・・」

「「「「な・・・」」」」

何だってー!?!?

と、クラスが沸き立つ。

「そ、そういえば苗字一緒だ!」

「ファンブックの写真もよく見たら面影ある!」

・・・え?え?

若干状況が飲み込めない俺。

「知つての通り織斑一夏はISを使える男だ。勿論、ISに乗れることも検証済みだ」

え!?!いつの間に検証されてたの!?!

「2つ目。こいつは実技テストをパスしている」

「じ、実技テストを・・・」

「通過あ!?!」

え?そんなに凄いことだったのか?

「こいつはIS使えるからな。男子の実技なんて楽勝の極みだ」

・・・うん、気付いた。

冬也さん嘘八百のカマをかけている!

意地でも俺を代表にしたいのかこの人!!

「さて、最後、3つ目か。やる気がないと言ったが、そんなことはない。織斑はいつでもやる気最大だ」

「え?」

「そうでしたのですか!?!」

いや、違う。と言おうとした瞬間、俺の背に寒気が走った。

- やれ。

冬也さんが睨みを利かせる。

「あ、あのー」

女子が視線を俺に集中させる。

……無理だ。この状況から俺の意志を貫くの。

「……MAXです、やる気。そりゃもう」

やや涙目で、俺はそう言ってしまった。

わが道を進むって……難しいんだな……。

放課後。

「冬也さん、どういうつもりなんですかー……」
「ぐだーっと湯船に冬也さんとだらしなくもたれる。」

「心配すんなー。アメリカ代表候補生相手に勝てば自信にもつながるだろー？」

「それ俺に言っちゃ意味無いでしょ!?!」

かぼーん。大浴場でよく出そうな音が鳴る。

と、いうか。ここは大浴場である。

知つての通り数年前からIS学園は有能な男子を取り入れる方針を執っているので、

男でも入れる日が出来た・・・ようになったらしい。

蒼空が『畜生！女湯覗きのイベントが少し起こしにくくなった！』と嘆いていたが、

まあ無視。

「で、どうすんですか。仮に俺がISを使えたとして、素人の俺が強そうな能書きの人にどうやったら勝てるんです」

「仮にじゃない。俺様お前も乗れるんだ」

「俺様って・・・冬也さん乗れるんですか？」

「あたぼうよ」

本当だろうか。イマイチ信用できない。

「本当だって、少しは従兄を信用しろ」

そう言って冬也さんは俺の頭を軽く小突いた。

「明日朝飯食ったら第3アリーナまで来い」

そう言って、湯船から上がって行ってしまった。

所変わって自分の部屋。のはずなのだが。

「秋良ー。スー リヤろうぜー」

布仏蒼空がノックも無しに入ってきた。

ちなみにスー リとはかつて一世を風靡したファ リーコン ユー
タの超名作の略称である。未プレイの方は是非最後までやって欲しい。

「別に構わんけど、今の時代それ持ち出してくるか」

「名作はいつまで経っても名作なんだよ」

そういつて蒼空はそこらへんにハードを置いて準備を始めた。ちなみに最後にプレイしたのは中3の時の夏、こいつと春と3人でやっていた。RTA世界記録にあと1秒だったのは記憶に新しい。

「俺飯食ってないから程々にな」
「へえへえ」

食堂が閉まる10分前に、俺は息を切らしながらやってきた。
あんにやるう・・・のめり込むようなゲーム持ってきやがって。
まあ、俺にも非はあるが。

「おねえさん、カレーライス。できるだけ急いで」

「あいよ、世辞が下手だねえ、ふふ」

よし、多分急いでくれるはずだ。

時間がないときで相手が中年の時はこの手に限る。

20秒もしない内にカレーライスが渡された。

すぐにダツシユ。食堂は走るの禁止とは暗黙のルールだが、それは人がいたららの話だ。

適当に座る。残り5分。

「さて、早く食わないと・・・ん？」

少ない人影の中、座っている後ろ姿。

(エレナ・・・か?)

「・・・」

少し身を乗り出すと、空になった食器を前に何かを考えているようだった。

「(そついや、この学校に来てから、1度も話してないな・・・)」

昔は公園で座っているのを見つけてつい話しかけてしまったが。
もしかすると自分からは下手なのか？

何にせよ軽く話しておくべきだろ。

俺は席を立った。

「よう、久しぶり」

「・・・」

俺が声をかけると、一度こちらを見て、すぐにまた何かを考え出した。

「・・・お前も、ここにきたんだな」

「・・・」

今度は視線もこちらにやらない。・・・むづ。

実は照れ屋なのだろうか？

「・・・なあ、エレナ」

そこで彼女は立ち上がった。そして、俺が一切予想していなかった言葉が、彼女の口から出た。

「・・・誰？」

「・・・え」

「おう、お帰り・・・どうしたよ、カレー持ちながら何回やってもエアーマンが倒せなくて心が折れそうな顔しやがって」

「・・・ああ」

正直シヨックがやばい。誰か殴って欲しい。

M的な意味じゃなく、気合い入れる的意味で。

・その願い、聞き届けたり・・・

ん？なんか声が「ちえーさー！！」くはっ!？

背後から従姉にどつかれた。本日2回目。

「っ・・・たいな!？カレー落としたらどうする!」

「え？あー、食堂閉まっちゃったんだ」

俺の持つ皿を見て、反省の色がない謝罪をする春。

あの後結局閉まるまでに食べなくて、ここまで持ってくることになった。

それにしても忘れてるとは・・・正直ここまでくるもんとは・・・

「ま、まあ、なにがあったかは知らねえけど、とりあえず俺、帰るわ」

俺の空気を察したのか、蒼空がファ コンを片づけようとする。

「えー。折角ここで蒼空がファ○コン勝手に持ち込んでスーリーやっていたような気がして来たのに」
すごい直感だな、お前。

結局、蒼空は残り、春と二人でマリオやっていた。俺はというとカレー食ってすぐに横になったが。

・・・そして、俺がいろいろ考えながら眠るのに10分もかからなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0342ba/>

IS -After infinity!-

2012年1月6日20時48分発行